



TITLE:

がん患者の苦痛に対する鍼灸治療  
の特徴とがん治療に関する鍼灸師  
の技術習得 鍼灸師とがん患者への  
聞き取り調査と質的研究を用いて  
—(Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

伊藤, 恒雄

---

CITATION:

伊藤, 恒雄. がん患者の苦痛に対する鍼灸治療の特徴とがん治療に関する鍼灸師の技術習得 鍼灸師とがん患者への聞き取り調査と質的研究を用いて. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19327>

RIGHT:

( 続紙 1 )

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	伊藤 恒雄
論文題目	がん患者の苦痛に対する鍼灸治療の特徴とがん治療に関する鍼灸師の技術習得 ―鍼灸師とがん患者への聞き取り調査と質的研究を用いて―		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、鍼灸治療を受けるがん患者と鍼灸師の関わりについて調査したものである。本論文は序章と結章を含む7章から成る。</p> <p>〔序〕では、日本のがん患者への鍼灸治療の現状と問題点に基づき、本研究の目的を説明している。鍼灸師の課題として、1．心理的苦痛への鍼灸治療の関わり、2．鍼灸治療での患者との接触や会話、3．鍼灸師が抱える困難感、4．がん患者治療のためのより良い技術習得に向けた研修内容を取り上げ、これらを調査して考察することが本論文の目的であると説明している。</p> <p>〔第1章 現代日本のがん患者の状況と医療者の関わりについて〕では医師や看護師、鍼灸師とがん患者の関わりについて、上記の1～4に関する先行研究を紹介している。</p> <p>〔第2章 研究方法〕では、10名の鍼灸師と7名のがん患者へ半構造化面接による聞き取り調査を行った経緯を説明した。聞き取り内容を文章化して内容分析を行い、各項目でカテゴリーやサブカテゴリーを抽出するという分析手法を説明している。</p> <p>〔第3章 鍼灸師から見たがん患者との関わり〕では、鍼灸師への聞き取り調査から抽出した内容を記載している。鍼灸師は患者と接する時間が他職種と比べて長い。鍼灸治療における優しい接触の「気持ち良さ」と疼痛緩和の効果により、鍼灸師は患者の信頼を得て、様々な悩みや希望を患者から聞かされる。しかし、鍼灸師は次第にコミュニケーションに自信を無くし、さらに疼痛緩和効果が減少するにつれて、自らの役割に対して懐疑的になる、ということが指摘されている。</p> <p>〔第4章 鍼灸治療を受療するがん患者について〕では、がん患者への聞き取り調査から抽出した内容を記載している。多くの患者は先ず、身体的苦痛を訴え、次に〈自分の症状や身体の状態〉や〈医療者や医療機関〉に関する話をする。その内容は、鍼灸師が申請者に話した内容とほぼ同じであり、患者と鍼灸師との心理的な距離感（治</p>			

療者でありながら医師よりも身近な存在に感じられること）も指摘されている。

〔第5章 考察〕では、チーム医療における鍼灸師の役割を3つ提案している。

1. 鍼灸治療は患者のQOLを高める役割がある。現代医学では有効な治療法が見つからない場合でも、患者は鍼灸治療に「気持ち良さ」を感じることが多いので、鍼灸治療により、患者のQOLを高めることが可能である。

2. 鍼灸治療は精神的苦痛に対しても有益である。鍼灸治療の中で鍼灸師は傾聴と共感的態度を取り、治療の一環として自然に患者に触れる。そのことを通して、精神的苦痛や心理的苦痛の軽減に対する補助的効果が期待される。

3. 患者に触れることにより、鍼灸師が患者の信頼を得ると、患者は不安や希望を鍼灸師に話すこともある。鍼灸師はその気持ちを医療チームの医師や看護師などに伝える役割を果たせる。

末期患者と関わる鍼灸師は、〔自分の鍼灸治療に効果がなくなること〕で強い困難感を感じていることも明らかとなった。鍼灸師の第1の役割は患者の症状緩和であり、患者もそれを期待しているためである。今後、がん患者に関わる鍼灸師が増えるにつれ、心理的負担を強く感じる者も増加し、有効な対策が必要になることを、申請者は指摘している。

従来、鍼灸師教育課程の内容は、〔患者への触れ方〕と〔治療法〕などの技術習得が中心であった。しかしながら、そこで学ぶ技術習得の方法はと言えば、指導者の治療技術や患者と関わる技法を見て真似る模倣が中心であり、体系的なものではなかった。〔結〕において、申請者はこの状況の改善を目指し、治療効果を高めるため、既存の「鍼灸師のための緩和医療研修カリキュラム」に対して、見直しを提案し、「触れる」鍼灸技術を盛り込んだ案を作成している。

(論文審査の結果の要旨)

近年、がん患者の症状改善やQOLを高める目的で、現代西洋医学だけでなく、補完代替医療も利用されている。補完代替医療の中でも鍼灸治療はがん患者の症状に対する高い効果を示す治療方法である。

鍼灸治療に関する先行研究は、患者の身体的苦痛への治療効果の研究がほとんどであった。それに対して本論文は、鍼灸師とがん患者の意識や、鍼灸治療の実践と学習法を中心に調査したものである。その結果と考察は、鍼灸師と患者の関係のみならず、医療従事者と患者の関係を考える上で、独創的な視点を持つものであると評価できる。

鍼灸師とがん患者の調査により、主に以下の3点が考察された。

A. がん患者の心理的苦痛緩和への鍼灸治療の役割

化学療法を受療するがん患者は食欲不振など、現代医学的治療では対処し難い症状のみならず、再発への不安や死への恐怖など、心理的に大きな苦痛をかかえる傾向にある。この終末期のがん患者は、鍼灸治療を受けることで気持ちが良くなることから、本研究で証明された。現代医療では効果が出にくい症状に対して鍼灸治療は効果を示し、患者は鍼灸師への信頼感と親近感を持つようになる。何度かの鍼灸治療中に、患者は心理的苦痛についても話すようになることが多い。鍼灸師は、接触や共感的態度、患者との会話や傾聴に加え、心理的苦痛に対する東洋医学的アプローチを繰り返し、患者の心理的苦痛緩和の一助となる、という流れが確認されたのである。また心理的苦痛に対応する治療として、医師が行う薬物治療や、看護師やカウンセラーが行う精神療法などとは異なり、身体に触れる鍼灸師の治療法が患者の信頼感を得るのみならず、言葉にならない安らぎを与える可能性も示唆された。患者が病の経験を鍼灸師に語ることで、自らの思いを明確にしていく場合もある。心理的苦痛を持つ患者にとって、看護師やカウンセラーのような専門家とことさらに向き合う必要なく、鍼灸治療という場のなかで心理的苦痛の軽減が可能となる。先行研究においては、身体的苦痛が議論の中心であったのに対して、本研究は鍼灸治療の心理的苦痛の緩和という効果を明確に証明したのである。

B. がん患者のニーズ理解について

鍼灸師は患者の身体に触れることで、患者の皮膚表面から皮下の状態（皮膚表面の緊張や弛緩、筋の硬結など）を捉え、患者の痛みの部位や痛みの程度、痛みの種類を推測できるようになる。患者と話し合うことで、患者は自分の痛みを鍼灸師に共感してもらえたと感じ、鍼灸師への信頼が形成される。会話だけではなく、身体の接触も加えることによって、患者の痛みが理解され、それが患者との共感につながるということは、また重要な示唆と言えよう。

鍼灸治療では、1回の治療時間が長く、がん患者は長期間治療を受け続けることになる。治療中は鍼灸師に触れられることが多いため、患者にとっては気持ちの良い治療と感じられる。その結果、患者には鍼灸師への信頼が生まれ、鍼灸師を医師よりも身近な存在と感じ、医師や看護師に話さない不安や希望を鍼灸師に話すようになる。鍼灸師がこの不安や希望をチーム医療内に伝えることは、患者のニーズを理解するために有効な手段となる。

#### C. 「鍼灸師のための緩和医療研修カリキュラム」への修正案

申請者はがん患者の「緩和ケアのための鍼灸臨床研修プログラム」に対する修正案を提示している。その内容は「緩和医療専門医をめざす医師のための研修カリキュラム」を参考にして、鍼灸師向けに改変したものである。患者が死を強く意識するにつれて、鍼灸師の慎重な関わりが必要となる。未告知の死に臨む患者との接し方においては、特にそうである。本論文は、その接し方の確認を含めて、そのための学習方法を提示しており、プログラム案の充実に向けて貢献するものである。

AとBは鍼灸師のチーム医療における役割を提案すると同時に、がん患者への関わり方は看護師や医師にも参考になるものと評価できる。Cは鍼灸のみならず、看護師が行うタッチケア、そして指圧やアロママッサージなど、身体に触れる補完代替医療者が、チーム医療に参加するための方法に対する有益な示唆を与えるものと評価できる。

終末期がん患者及びその治療に関わる鍼灸師に対する調査と分析は、これまではほとんどなく、ここに本研究の学術的価値が存在するといえることができる。人間・環境学研究科 共生人間学専攻 人間社会論講座に相応しい、十分な研究論文と判断する。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年5月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公開可能日：        年        月        日以降